

ラディカル・フェミニズムにおける性愛の可能性

—— ドウォーキンの功罪 ——

吉澤 夏子

本稿では、ラディカル・フェミニズムの流れをくむアンドレア・ドウォーキンの代表作『インターコース』を取り上げ、まず、ドウォーキンの議論の中核をなす二つの主張を剔出することによって、その基本的な構造を明らかにする。次に、ジャンヌ・ダルクの分析に用いられた「反逆としての処女性」という概念の詳細な検討を通じて、「男と女の関係はすべて性関係である」というドウォーキンの第一の主張の意義を明確にする。最後に、テネシー・ウィリアムズの戯曲の分析に用いられた「烙印づけられた人間」という概念に依拠しながら、「男と女の性関係はすべて性差別である」というドウォーキンの第二の主張には、それを必然的に導出する根拠がなく、その正当性に疑義がある、ということを示す。我々は、ドウォーキンから何を学びとり、そしてドウォーキンの何をのりこえるべきなのだろうか。それをはっきり見きわめることが、90年代のフェミニズムの展開にとってまず肝要なことである。

1. ドウォーキンの議論の基本的構造

【1】ラディカル・フェミニズムとは何か

フェミニズムの思想を支える、もっとも基本的な構えは、いうまでもなく「平等」志向にある。近代市民社会を成立させた「万人の平等」という理念に依拠することによって、はじめて、女性の劣等性（従属的な位置）を不当なものとして認知・告発する道が開かれ、「男なみの平等」を求めることに正当性を主張することができるようになったからだ。こうした「平等」志向に対して、しかし、男性と女性の性差を基本的に異質なものとして捉えるいわゆる「差異」志向も、一つの基本的な構えとして常に存在していた。フェミニズム思想の歴史は、「平等」志向を本流に、それに対して、「差異」志向が常に一つの傍流を形づくり、この二つの立場を

中心にしてさまざまな潮流が絡みあい、複雑な彩りを成している、といえる。

フェミニズムには「平等」志向と「差異」志向を中心とするさまざまな潮流がある、というこのような事実認識は、しかし、さらに抽象的なレベルに定位してみると、そもそもフェミニズムという思想の内部には、こうした相矛盾する二つの立場を絶えず生みだしていくような、論理的な契機があるのだ、と読み換えることもできる⁽¹⁾。

「平等」志向の徹底化の最終的局面には、差別もろとも区別を撤廃する、つまり、男性と女性の性差そのものがなくなる限り差別の解消は不可能である、という思想が現出する可能性がある。なぜなら、もし、男という性、女という性がある限り、性関係をも含む男と女のあらゆる関係は、絶対的な支配-服従関係という

政治的な関係によって浸食されてしまう、つまり、女が男と何らかの意味で関係（社会関係・性関係）をもてば、それはすべて差別的な関係に転化してしまう、と考えるなら、男性と女性という二分法そのものを放棄する以外に、差別から逃れる方策はないことになるからである。

アメリカのウィメンズ・リブの高まりの中で登場した、ケイト・ミレットの『性の政治学』は、文学批評を軸に、法や経済などの制度的領域のみならず、男と女の性関係を含むあらゆる社会領域のすみずみにまで浸透している性差別体制、すなわち男性優位主義の構造を、その根底から暴きだし、「リブの聖書」とまでよばれた。ラディカル・フェミニズムは、従来の制度的・形式的水準での「男なみ平等」の達成要求が、この男性優位主義の社会構造内部にとどまるものでしかないことをはっきりと認識し、こうした社会構造それ自体、その発生の地盤そのもの、を告発の対象とした点で、画期的な意義をもっていた。男と女の性関係という、もっとも個人的・私的な文脈に属すると考えられていた事柄にまで、支配-服従という政治的な関係が貫通している、という事実が、ヘンリー・ミラー、ノーマン・メイラー、ジャン・ジュネなどの小説に現れる性描写の克明な分析から、次々と明らかにされる。男と女の間の特異な生物学的行為の描写にすぎないと何の疑いもなく思われていた場面が、実は、悉く性の政治の表出の場面であったことを、我々は知らされるのである。性の政治は人類の半数を占める女性を「内部植民地」として抑圧し、この抑圧をさまざまな形で正当化する。「家族」や「恋愛」や「結婚」、そして「美」や「宗教」も、この文脈では、女性にこの従属的な被支配者としての位置を喜んで引き受けさせるためのイデオロギーとして機能する。この体制の中で、生まれ育つ女

性は、こうした差別的価値をまさに肉体化（内面化）し、文化的に作られたにすぎない「女らしさ」を自らの本性だと思いこみ、まさに「第二の性」としてこの男性優位主義の性差別体制を強化していくのである。

このように60年代以降、男と女の性関係にこそ差別の根本原因がある、とその発想を転換させたラディカル・フェミニズムの展開において、一方で、科学技術によって女性を妊娠・出産という重荷から解放し、性差そのものを解消しようとする方向性が、そして他方で、男を排斥し「女だけのユートピア」を建設しようとする方向性が現れたのは、論理的な必然だともいえる。なぜなら、女であること、という端的な事実性が、差別的な状況を結果すると考えるなら、女であること、をやめることがもっとも簡単であり、それは科学技術の無限の発展に希望を託して男女の身体的差異を消滅させることによって達成されるからだ。しかし、また、そのような科学技術が未だその実現をみていないということも事実であり、したがって、現状において、差別から逃れる手段としては、「女として」男との関係を一切もたない、ということ以外にはない。「女だけのユートピア」とは女にとって、唯一の差別のない社会となる。

ここに、我々は、飽くなき男女平等への渴望が、「女の女による女のための社会」を生み落とすという逆説、を見る⁽²⁾。つまり、おおよそフェミニズムという思想の内部には、「平等」への志向性が、「差異」を強調したり、「差異」そのものを解消したりする志向性へと、ドラマティックに転換する論理的な契機が、必然的に含まれているのだ、と考えることができるのである。

本稿では、ラディカル・フェミニズムの流れをくむアンドレア・ドウォーキン（Andrea

Dworkin) の著作『インターコース』(Dworkin [1987=1989]) を取り上げる。ここに、我々は、フェミニズムがその内部に孕む矛盾の凝縮した形態をみることができるからだ。

【2】ドウォーキン の二つの主張

ドウォーキンの著作は、男と女の性関係そのものの中に性差別の根本要因を見出し、男性のセクシュアリティの差別性をどこまでも追及し暴きだそうとする情熱に支えられている。ラディカル・フェミニズムの「ラディカル」が、男性優位の性差別体制そのものをどこまでも告発していく、その徹底性を意味しているとするれば、ドウォーキンこそまさに真正のラディカル・フェミニストといえるだろう。

80年代のアメリカのフェミニズムの新しい展開の中で、ドウォーキンは、再び男と女のセクシュアリティの分析を通して、男性による女性の性の搾取の構造を徹底的に暴きだしている。ドウォーキンは、我々がまったく個人的・私的な出来事だとみなしている性関係(性的行為)それ自体の営みの中で、法的・経済的・文化的・宗教的・社会的な性差別の構造が、すなわち支配者としての男に対し、常に被支配者として、劣等なものとして位置づけられているという女の状況そのものが、一瞬一瞬いかに確認され強化されているか、を見事に開示する。性的行為は、男がその優位性を誇示し、女にその劣位性を認めさせる、まさに現場に他ならない。

ドウォーキンの議論をつぶさに検討してみると、そこから我々は、次のような二つの主張——それは彼女自身の中では明確には分離されていない——を分析的に剔出することができる。一つは、男と女の関係とは、おおよそすべて性交(インターコース)を伴う性関係またはその変種である、ということである。たとえば、男

が女を見ているだけでも、その男がその女を「女として」見た瞬間、女は男の性的欲望の対象として存在し始めることになり、その二人の関係は性関係であるといえる。したがって、男と女の間には差別があるとすれば、それは、性関係以外の要因、たとえば、制度的な関係(法的・経済的な関係)から説明することは究極的にはできないのであり、どうしても性関係そのものにそくして考えていかなければならない、ということになる。そもそもラディカル・フェミニズムは、制度的な男女平等を達成していくフェミニズム運動の展開の中で、制度的な側面での、つまり形式的な平等の達成がどんなに進んでも、女の側の不平等感が解消されない、という実情に対する苛立ちから生まれ、制度から性関係へと、その焦点を根本的に転換させた、という経緯をもっている。これこそラディカル・フェミニズムの最大の意義だといわれるものなのである。

もう一つは、性関係はすべて性差別である、という考え方である。男と女が性的に関係している以上、それはすべて差別的な関係である、という考え方にこそ、ドウォーキンの思想の衝撃性があるのだといえる。ここから、ドウォーキンの議論のインプリケーションとして、女は女である限り差別される以外にないのだから、差別されたくなければ男と関係をもたなければよい、「女だけのユートピア」に逃げこめばよい、といった結論を導きだすことも可能だと考えられているのである。

我々は、この二つのドウォーキンの主張を詳細に検討することによって、ドウォーキンからいったい何を学び、ドウォーキンのいったい何をのりこえなければならぬのか、を明らかにしたい。その分析の徹底性ゆえに、ドウォーキンは、フェミニズムが必然的に直面する「転換

の契機」のまさにその現場へと我々を連れていく。そしてその徹底性ゆえに陥らざるを得なかった深刻な畏がどのようなものであるか、をまのあたりにさせるのである。我々の問題とは、まず「男と女の関係はすべて性関係である」という考え方にいったいどのような重要な意義があるのかということ、そして「性関係がすべて性差別である」という考え方が、はたしてドウォーキンの議論の内部で正当化されるかどうか、ということである。

『インターコース』というこの洞察に溢れる書⁽³⁾から、我々は、これまでのフェミニズムの展開に影響を与えた重要な思想を読みとることができる。しかし、それはまた我々が、自らの歩みの中で、最終的には斥けねばならないものでもあるのだ。

2. 処女性の誤謬

【1】ジャンヌ・ダルクの奇跡

男と女の関係はすべて性関係である、というドウォーキンの主張を考察する手がかりは、彼女がジャンヌ・ダルクの分析に用いた「処女性(virginity)」という概念にある。

処女性という概念は、現代社会的な文脈では急速にその意味づけを変化させつつあるともいえるが、しかし、一般には、女らしさ、女としての高い価値、を表現するものだとみなされてきた⁽⁴⁾。それはまた、フェミニズム思想においては、女性にのみ課せられる性の規範の存在を象徴するものとして、常に意識されてきた。しかし、ドウォーキンが、ジャンヌ・ダルクをその処女性ゆえにこれまでのヨーロッパ女性の中でほとんど唯一無二の存在として問題にするのは、これとはまったく異なる水準においてであり、その分析・解釈における独自性は際立っ

ている。では、まずドウォーキンの議論を詳細に辿りながら、ジャンヌ・ダルクの「処女性」とはいったい何だったのか、を明らかにしよう。

ジャンヌ・ダルクの生涯は、現代人の目には、まさに奇跡の連続に映る。わずか十代の少女が、「オルレアンを解放し、フランスを救え」という神の再三にわたるお告げに促され、軍の先頭に立って戦場に縦横無尽の活躍をし、異端者として糾弾された法廷でも、最後まで自己の信念を曲げることなく、「イエズス様」という叫びを残して火刑台の上に果てた、こんなことがなぜ可能だったのか。

ドウォーキンは、しかし、この奇跡よりもさらに驚嘆すべき奇跡は、ジャンヌがこれまでの女性たちには事実上不可能だった「女の状況からの離脱」を達成したことである、という。「処女性」は、ドウォーキンにとってこの奇跡を象徴するものに他ならない。「ジャンヌは、彼女のいかなる軍事の大勝利よりもっと奇跡的な、女の状況からの離脱を達成したのである」〔171〕。「彼女は、社会的にリアルかつ絶対的であり、本質として強制的である、女に関する形而上学的の定義から、ものの見事に離脱を果たした。彼女は、男の欲望の試練に耐える必要もなくなり、それゆえ自由であった——これは本当に稀で、質と種類の点でも驚くべき自由である。この自由は男にとっては普通のものだが、女にとっては事実上獲得不可能なものである」〔172〕。

当時、女であることとは、「ちっぽけな範囲の限界と低劣な可能性、社会的劣位と性的従属、男への服従、男の力ないしは暴力への屈服、男に性的に使用されるか、さもなければ世界から引退するしかないという宿命、市民として意義の欠如を意味していた」〔149〕。女であることを引き受けることは、まさにこのような「女の

状況」をそのまま引き受けることに他ならなかった。通常、女たちは、こうした社会的な従属状態を当然のこととして受諾し、その中でいわゆる女らしさの表現として、あるいは女のたしなみとして、処女であることを選択した。しかし、ジャンヌの処女性とは、いかなる意味においても、女らしさや女としての価値を表すものではなかった。それは、いわば「反逆としての処女性」、すなわち、「女であること」に纏わるすべての社会的・文化的意味づけを拒否し、女の状況を、全体としてまるごと斥けるための、「存在としての独立性」を示すための処女性であった。ジャンヌは、自分の能力の可能性を狭い範囲に限定されたくなかったから、社会的に劣位にあるとみなされたくなかったから、市民としての価値を否定されたくなかったから——、だから、女であることのもっとも核心的な要件である、女として男に性的に使用されること、を拒んだのである。それは、まさに、男の権力的支配そのものに対する反逆であった。ドウォーキンが、ジャンヌの物語を、最初から最後まで「政治的」なものだとみなすのは、この反逆性ゆえである。

このような「反逆としての処女性」は、ジャンヌの時代の人々には広く知られていた、聖カタリナと聖マルガリータという二人の聖女の伝説にも見出される。二人の聖女はともに、時の権力者である男から求愛され、その求愛を拒んだため、投獄され拷問にかけられ首を斬られて、死んだ。二人は、「男の支配の基本前提である、男が彼女の体をセックスのために盗用する権利を拒絶し」、「男の権力と国家の権力が合体している男、即ち、女に対する男の権力の原型を拒絶した」〔164〕のである。彼女たちの処女性は、「自分のことは自分で決めるという人間としての完全性のための一つの積極的な要素」

〔167〕であり、男の女に対する支配そのものに対する拒絶の態度を表明するものであった。したがって、それは、男の権力の及ぶ範囲で、男社会の価値観を内面化し、その権力を最終的には是認することで成立するような、従来の意味での処女性とは根本的に異なるものであり、伝統的な価値観を覆しかねない危険なもの、つまり、犯罪だとみなされたのである。

ジャンヌの処女性も、まさにこのような意味での反逆的処女性に他ならなかった。しかし、ドウォーキンによれば、ジャンヌの反逆には、この二人の聖女たちの場合にはなかった特異な意味があり、そしてそこにこそ、ジャンヌの成し遂げた奇跡の意義がある、という。二人の聖女たちが殺されねばならなかったのは、そもそも、男が彼女たちを「女として」欲したからである。男は彼女たちを欲し、権力によって意のままにしようとした、しかし、彼女たちはその権力に反逆した、だから殺された。彼女たちは、女として見られ欲望される、という「女の状況」から自由だったわけではない。しかし、ジャンヌは唯一人この「女の状況」から逃れることに成功した。ドウォーキンは、裁判記録に残された、軍隊の男たちの証言を引用している。——証言は次のように語る。「男たちは彼女に対して、絶対に欲望を抱かなかった。つまり、彼らは時として彼女に肉欲を感じたが、しかし敢えてそれに屈することは絶対になかったのである。彼らは、それを試みるのは不可能だと信じきっていた——」。「彼女を見た瞬間に、肉欲を決して感じませんでした」。「軍隊では、時として、私もジャンヌや兵士たちと一緒に、皆わらにくるまって寝ることがありました。そんな折、彼女の寝仕度を見ているし、美しい乳房を見たいこともあります。しかし、決して彼女に対して肉欲は感じませんでした」〔170-1〕。

ここで、重要なことは、ジャンヌの乳房を美しいと感じた男が、しかし、彼女に欲望を感じなかった、ということである。なぜなら、我々の社会には、男の欲望は女の美に対する認識、反応である、というイデオロギーが蔓延しているからだ。つまり、女が美しいがゆえに、男がそれを欲するのだ、というわけである。だから、ジャンヌについても、彼女が軍隊において、男たちの欲望を引き起こさなかったのは、彼女が美しくなかったからだ、という説明がなされ、それが容易に受け入れられてしまう。しかし、少なくとも、ジャンヌが美しくなかった、と断定できるような事実を証言の中に見出すことはできないが、彼女の裸体を美しい、と感じた男がいたことは明らかなのである。ともかく、ジャンヌが美しくなかったから男たちは彼女に欲望を抱かなかった、という説明は、ジャンヌの成し遂げた奇跡の重要性を過小評価するものである。ドウォーキンの文脈では、美しいと感じた女の存在を目前にしなから、その女が女であることに思っていたらなかった、すなわち、その女を性的に使用しようとする欲望が麻痺してしまったこと、そのことこそ、ジャンヌが成し遂げた奇跡の内実なのである。

ジャンヌはこの奇跡を、男の天職（闘士として戦うこと）を全うすることと男の衣服を身につけること、で達成した。そして、このことのゆえに、ジャンヌは殺されたのである。ジャンヌは「女の状況」をまるごと拒絶し、「自由が男の側にあるという理由のために、男の状況を選び取った」〔172〕。男であるというだけで自由を享受している男の状況を欲し、闘士という男性的価値によって男と同一化し、男の役割を引き受け、その男の状況をまさに我がものとした、ということによってジャンヌは殺された。「彼女は、手にした自由のために、男から強奪

した状況のために、性別による決定への反逆のために殺されたのである」〔173〕。ジャンヌが殺されねばならなかったのは、「男が彼女を欲したからではなく、欲望される者としての外面的な制服（女の衣装）まで含め、状況そのものを拒絶したから」〔166〕なのである。

そして、男の衣装は、ジャンヌが男の状況を我がものとするために、必然的に必要なもの、「反逆を意義づけ、行動を可能にするもの」であった。したがって彼女の男装は「彼女を憎む人びとにとって、彼女の卓越した完全性の忌まわしい象徴となった」〔174〕。だからこそ、裁判において、査問官たちは、執拗にジャンヌの男装を糾弾し、それを最大の犯罪に仕立て上げたのである。また、だからこそ、彼らはジャンヌの処女性をほとんど問題にしなかったのである。処女であることは、神に対する愛の証しとして、すなわちジャンヌが本当に神の声を聞き、その声に従ったことの証しとして認められる可能性もあった筈である。しかし、査問官たちはことさらにジャンヌの処女性を無視した。それは、彼女の処女性が、女の衣服の中にあるものではなく、男の衣服の中にあるものであり、そこに、ジャンヌの「肉体的無欠性」、つまり、男の権力に反逆し、決して男の意のままになることのない肉体の存在、が象徴されていたからである。

ジャンヌが求めていたのは、プライバシーの権利（神と直接関係をもつという良心の自由）であり、それは肉体的プライバシーの権利があってはじめて成立するものである。査問官にとっても、ジャンヌにとっても、男の衣服はこのプライバシーの権利を意味していた。彼らは、ジャンヌの確信に満ちた真正らしい態度をみて、男の衣服こそ、彼女のこの強さ、この抵抗を支えるものだ、と考えるにいたる。男装さ

えしていなければ、ジャンヌもただの女、男の権力に屈服させることができるはずだ、と。だからこそ、彼らは、ジャンヌから男の衣服を剥ぎとり、彼女の肉体に侵入し、彼女を屈服させようとしたのである。また、ジャンヌにとっても男装そのものが問題だったわけではない。彼女はただ「見られたり、触られたり、想像されたりすることによる侵入を、防ぎ止める衣服」〔179〕を、すなわちプライバシーを欲していたにすぎないのである。ドウォーキンは、「ジャンヌは、この肉体的プライバシーの権利のために死んだのだが、他の諸々の権利もこの権利から引き出され得るし、またこの権利がないとすれば、他の諸権利も無意味になってしまうのである。この意味で、彼女は全女性のために、全女性を代表して死んだのである」〔178〕と言っている。

【2】「女の状況」の二重性

ドウォーキンは、ジャンヌ・ダルクの処女性を「本質としての低劣な状況を付与される女一般の宿命に対する、自意識的かつ闘争的な拒絶」〔148-9〕だと積極的に位置づけることによって、「女らしさ」の表現として評価される、いわば消極的な処女性——それはジャンヌの時代から現代の我々の社会にいたるまで、一般に、女の高い価値を示してきた——との鮮やかな対照を我々の前に開示した。ジャンヌがその壮絶な死の瞬間まで、女の従属状況を拒絶するために「女であること」そのものを拒絶するという「反逆としての処女性」を断固として貫き通したという事実は、逆に、男と女の関係性そのものの内に、男の女に対する、社会的、経済的、政治的、肉体的権力がいかに浸透しているか、そして「女として」その状況から逃れることがいかに困難であるか、を改めて我々に認識させ

る。

ドウォーキンは、すでに指摘したように、ジャンヌが、軍隊の中で男である兵士たちと寝起きを共にしながら、その男たちの性的欲望の対象とならなかった、という点を強調し、そのことを、当時いかなる意味でも男に従属する劣等な位置しかもちえなかった「女の状況」からの離脱として評価し、それを「奇跡」とよんだ。そして、この「奇跡」は、ジャンヌが女でありながら、戦場における英雄として前代未聞の活躍をしフランスを滅亡の危機から救ったというもう一つの「奇跡」を導く重要な要因だとみなされている。前者の奇跡は、それまでの女性たちが決して達成することができなかった奇跡であり、後者の奇跡は、それまでのどんな勇敢などんな優秀な軍人（男性）たちにも達成できなかった奇跡である。

ジャンヌは女としての従属状況を拒絶するために「女であること」そのものを拒絶した。したがってジャンヌは、「男として」生きることを選択し、男装をして、強さと男らしさという男性的価値を実現するために、馬に跨がり武器を手にして勇敢に戦った。では、ジャンヌは、軍隊の兵士たちに、はたして「男として」受け入れられていたのだろうか。つまり、彼らは、ジャンヌを「女として」受け入れずに、「男として」受け入れていたために、彼女に欲望を抱くことがなかったのだろうか。またジャンヌがフランスの市民たちに「男として」受け入れられていたために、戦場において英雄的な活躍ができたのだろうか。ドウォーキンは、ジャンヌが「男として」生きることによってはじめて、女の状況からの離脱を果たして、フランスを奇跡的勝利に導くことができたのだ、といている。しかしもしその論理が正しいとすれば、ジャンヌがもともと男であったなら、事はもっと簡

単に運ぶはずだということになる。しかし、事実、ジャンヌが現れるまで、どんなに優秀な指揮官の下でも、フランスは連戦連敗だったのだ。つまり「ただの男」ではどうにもこの苦境を救うことはできなかったのだ。だとすれば、ジャンヌが女であることをまるごと拒絶し、男として生きた、ということの意味をドウォーキンのように文字通り単純にうけとってよいものだろうか。

この問いは、つまり、ジャンヌの成し遂げた女の状況からの離脱とは、はたしてドウォーキンのような意味での奇跡なのだろうか、ということである。確かに、ジャンヌが男たちから性的な対象だとみなされなかったことは事実であり、そのことは、ある意味で——ドウォーキンのように、女であることのもっとも核心的な要素は、男によって性的な対象だとみなされることだ、と考えれば——女であることの束縛から逃れえたことの証しだと考えられる。また女であれば通常、男の衣服を身につけることも、戦場で勇敢に戦って強さと男らしさを示すことも許されないのに、ジャンヌはそのような禁止を破って、しかも、そのことを英雄的行為として讃えられた。このことも、その証しと考えられる。しかし、そのような事実は、ジャンヌが女の状況から逃れえたこと、つまり、男が女を支配する、という差別的な社会構造から逃れえたこと、を示すものだろうか。

ドウォーキンの議論からすれば、男から性的対象として扱われなかったということは、すなわち、女の従属的状況から自由であったということになる。男の女に対する権力＝支配の構造をもっとも象徴的に集約して示す場所、それが性的行為に他ならないのだから、性的行為の現場となりうる地点にまさに立ちながら、男の性的欲望を麻痺させたということは、すなわち男

の支配から逃れた、ということになる。しかし、はたして、男の性的欲望を麻痺させたということが、事実上、ジャンヌが女として見られていなかった、女として意識されたり扱われることがなかった、ということの意味するのだろうか。いいかえれば、男と女の性関係とは、男が女を性的対象として扱うということのみに還元するのであろうか。ここで我々は、ドウォーキンのいう「女であること」の意味をもう一度検討し直してみる必要がある。

結論からいえば、ジャンヌの存在が軍隊生活において男たちの欲望を引き起こさなかったことは、彼らがジャンヌを女として見ていなかった、ということも必ずしも意味しない。むしろ、旗印と剣をもってオルレアンの解放戦線に登場してから火刑台の上に倒れるまで、ジャンヌが女として見られていない、意識されていない、そのような瞬間は一瞬たりともなかった、と考えられる。まして、常に「処女ジャンヌ」とだけ呼ばれていた少女が、男として扱われていたとは到底考えられない。彼らは確かに、ジャンヌの男としての役割は受け入れていた、しかしそれは彼女を男として受け入れていたことを示すわけではない。ジャンヌは、徹頭徹尾、女でありながら、しかも男の性的欲望の対象にはならなかったのである。それはなぜか。答えは簡単である。ジャンヌは性的存在である以上に、何よりもまず宗教的存在であったからだ。ジャンヌは、確かに普通の女として見られてはいなかった、ただ神の声を聞くことのできる特別な女として見られ、そのように扱われていただけなのだ。特別な女も、女であることには変わりはない。ジャンヌに時として肉欲を感じた兵士たちに、彼女を性的対象として扱うことは不可能だと信じさせたものは、ジャンヌという存在が帯びていた聖性である。聖母マリアに欲望を

抱くことは、おそらく強い罪の意識を伴わずにはおこなわなかつたであろう。ジャンヌの登場が、当時のフランスの人々に偉大なる神の恵みとして熱狂的に迎えられていることを考えれば、兵士たちの間に、ジャンヌを聖なる女として位置づける視点が共有されていたとしても不思議ではない。だとすれば、「それを試みるのは不可能」と感じたのも当然だといえる。また聖なる女は、誰か特定の男のものであってはならない、それは誰のものでもないみんなの女、「我々の女」でなくてはならないのだから、ジャンヌが処女であることは、当然のこととして広く強く意識されていたであろう⁽⁵⁾。「処女ジャンヌ」という呼び名が、まさにこのことを裏づけているといえるだろう。

したがって、ジャンヌが、男たちの間に性的欲望を引き起こさなかつたことから、直接彼女が女の状況を離脱した、という結論を導くことにはかなり無理があるといわねばならない。ジャンヌは、「処女ジャンヌ」として、終始「特別な女」だとみなされていたのである。女の状況とは、男であれば男であるということだけで優位に、女であれば女であるということだけで劣位に置かれてしまうという社会構造そのものことである。男が構造的にアドヴァンテージを握っているこのような社会構造では、女というものをたえず二つの極へと分断していく力が働いていると考えられる、つまり、「特別な女」と「普通の女」へと。女性を崇拜し、女性を讃え、けっして性的欲望の対象とはしない、ということが時としてこのような社会に見出されても、そのことが、女の状況そのものから離脱し自由になった、ということの意味するものだと解釈するわけにはいかない。むしろそうした差別的な社会構造が強固に機能しているがゆえに、つまり女性は潜在的にはすべて劣位に置かれて

いる、という前提がけっして揺らがないからこそ、その裏返しとして、「特別な女」（この場合は、聖なる女）の存在が許される⁽⁶⁾、という構造が現出すると考えられるからである。そうだとすれば、ジャンヌが「特別な女」だとみなされ、性的対象として扱われなかつたことは、むしろ、男支配の社会構造の強固な存在を示唆するものだとさえいえることができるのである。

このように考えれば、ジャンヌの処女性を「反逆としての処女性」として捉えるドウォーキンの視点そのものの意義ないし妥当性は十分認めるにしても、それがただちに、女の状況からの離脱という「奇跡」を示すものとなるわけではないことは明らかだ。男の性的欲望を麻痺させえたことは、確かに通常の女たちにはほとんど不可能な、奇跡ともよぶうる非常に稀なことであったかもしれない。ジャンヌは、その意味では、確かに奇跡的に女の状況を離脱したといえる。しかしそれは、女の状況のある一側面から離脱した、ということにすぎない。女の状況とは、厳密に言えば、女を否応なく二つの地点へと、つまり特別な女と普通の女へと追い込んでいく社会構造そのものことであり、したがって、男の性的欲望を麻痺させたという状況も女の状況のもう一つの側面だといえる。つまり、ジャンヌが男の性的欲望を麻痺させえたのは、まさに、ジャンヌがそのような二つの側面をもつ女の状況の中に（聖なる女として）位置づけられていたからであり、けっしてそのような女の状況から自由であったからではない、といえるのである。

ジャンヌの成し遂げた歴史上の奇跡についても、これと同じことがいえる。どんな男でさえ達成できなかった軍事上の勝利を、わずか十代の少女が導いたとは奇跡中の奇跡である、という見方は、しかし、我々の論理からすれば、わ

ずか十代の少女だからこそ、つまり男ではなく女であったからこそ、そのような奇跡を引き起こすことができたのだ、という見方に変換される。ジャンヌが、フランスの窮地を救うために神から遣わされた「特別な女」として見られ扱われていたことは疑いえない。オルレアンに入城するジャンヌを、市民たちは歓声をあげて迎え、我先にジャンヌの体や馬に触れようとした。その熱狂ぶりは「あたかも神が降りたようだ」と記されている⁽⁷⁾。解放のさいには、神のこの偉大な恵みに感謝するために、誰も彼もがいっせいに町の中心にある教会に向かったという。ジャンヌは、まさに神の御業をこの世に実現するために現れた聖なる女、特別な女として市民たちの賛美の対象となったのである。敵軍の包囲の中で、もはや神の力を頼むほかないというところまで追い詰められてしまった市民たちの間に、神のお告げを受けたと自称するこの少女こそまさに自分たちを救うことのできる「特別な女」である、これこそ神の恵みである、奇跡である、という確信が生まれても不思議ではない。すでに述べたように、どんなに優秀な指揮官もフランスを勝利に導くことはできなかったのだ。ここで、神のお告げを受けたと称する「男」が現れたとしたも、ジャンヌほどの衝撃性はなかったのではないだろうか。奇跡の可能性は否定できないにしてもやはり、ジャンヌが男の役割を引き受けていたから、というよりむしろ、ジャンヌが、軍事上の戦略のことなど何も知らない十代の少女だったから——すなわち、優秀で戦略にも通じている働き盛りの勇壮な男、という価値をすべて反転させたマイナスの価値を帯びていたから——、逆に、市民や兵士たちの間に、これまでにはない特別な聖なる感覚、高揚した気持ちを引き起こしたのではないか、そしてそれが結局歴史上にも稀な奇

跡的勝利を呼ぶことになったのではないか、と考えられるのである。

ジャンヌは、市民たちにとっても兵士たちにとっても、最初から最後まで「処女ジャンヌ」として特別の価値を帯びた存在だった。このことは、ジャンヌが、男にのみ許されている美徳的という価値を我がものとするために、男装をすることによって男の状況を選びとろうとしたこと、と奇妙な対照をなしている。ドゥォーキンによれば、ジャンヌは男の役割を引き受け、男性的価値を体現するために、男装した。男装は、ジャンヌが男と同じように、武器をもち馬に跨がり勇壮に戦い、戦場から戦場へと自由に移動するために、どうしても必要なものだった。したがって、ジャンヌはいわば自ら男になりきることによってはじめて、歴史上の大勝利という奇跡を達成できたのだ、ということになる。しかし、我々の議論からすれば、ジャンヌは女の状況からけって自由であったわけではないのだから、当然男の状況を我がものにできたはずもない。ジャンヌは、男の役割を引き受けたから、男装したから、英雄になれたわけではない。むしろ逆に、「処女ジャンヌ」であったからこそ、つまり特別な女だとみなされていたからこそ、男装をすることも、男の役割を引き受け馬に乗ったり武器を持ったり軍隊の指揮をとったりすることも、そして英雄になることさえ許されたのだ、と考えるべきである。男装に象徴される「反逆としての処女性」は、ジャンヌ自身の側ではすでに述べたような意義をもつが、しかし、ジャンヌを受け入れた側では、それはあくまで聖なる女を象徴するものとみられていたにすぎない。だからこそそれはジャンヌの歴史的役割が終わったと判断された時点で、ただちに文字どおり「反逆としての処女性」として弾劾されることになったのである。誰も、ジャ

ンヌを「男」だなどと夢にも思ったことはなかった。ジャンヌは徹頭徹尾「女」でしかなかったのである。

【3】性的欲望のゼロ度

以上、我々はジャンヌ・ダルクの処女性を「反逆としての処女性」だと捉えるドウォーキン視点について詳細な検討を重ねてきた。その結果明らかになったことを、簡単にまとめておこう。

ドウォーキンによれば、「反逆としての処女性」とは「女であること」そのものを拒絶することであり、それは、ジャンヌにとっては、男装をして、強さと男らしさという男性的価値を体現するために男の役割を引き受けることを意味しており、さらにそれは、ジャンヌのまわりの男たちが、ジャンヌを性的対象として扱わなかったということで、完璧なものとなり、それによって、女の状況からの奇跡的な離脱を果たした、ということになる。しかし、ジャンヌが離脱を果たしたのは、女の状況の一側面であって、その全体ではない。つまり、ジャンヌが男たちの性的欲望を麻痺させた、ということだけで、女の状況を離脱した、という結論を導くことはできない。我々の議論では、女の状況とは、女であるということだけで劣位におかれてしまうという社会構造⁽⁸⁾ そのものであり、そこには、女が性的対象として見られ欲望されるということも、またある女が特別な女として性的対象から外されることも、ともに含まれるからである。

ここで、我々は、ドウォーキン以上のドウォーキン主義者になっているといえる。男と女の関係がすべて性関係である、という点はまったく正しい。そのような事実認識を我々はドウォーキンと共有している。ドウォーキンにとって、

性関係を決定づける要因は性交にある。したがってその性交という核なしでは、いかにドウォーキンでも性関係があるとはいえないのだ。性交という核とは、要するに、性的欲望に還元できる。僅かでも性的欲望が男と女の間が存在すれば、それは性関係である。したがってその性交という核なしでは、すなわち性的欲望が微塵も存在しない場所に性関係があるとは、いかにドウォーキンでもいえなかった、ということであろう。ドウォーキンは性的欲望のゼロ度という一点のみを、性関係の定義から外したのだ。しかし我々の議論では、性的欲望のゼロ度ですら、性関係に含まれる、と考える。つまり男と女の間はすべて性関係であり、女が性的対象とされることが性関係であることはいうまでもなく、女が性的対象から外されることも、男と女の性関係の一変種だとみなすのである。ドウォーキンは女の状況を性的欲望の有無から定義したために、性的欲望の網の目から逃れられれば、女の状況から逃れることも可能だと考えた。それに対して、我々の議論では、そこから逃れたとしても、そのこと自体がすでに「女であること」の一つの効果であり、女の状況から離脱したことにはならないのだ、と結論づけたのである。そして我々の強調したい点は、まさにこのことなのである。「女であること」から一瞬たりとも逃れて生きることはできない、ということ、「女であること」は、たとえ性的欲望のゼロ度の場面においても、厳として人を捉えて放さない、ということ、これである。男に性的欲望さえ抱かれなければ、男と性的行為さえ行わなければ、「女であること」から離脱できるとすれば、ある意味では、それは簡単なことだともいえる。しかし「女であること」とは、我々が観念的に想定できるよりは、はるかに複雑で奥の深い事柄だといえるのではないだろうか。

さて我々は、ジャンヌ・ダルクの処女性についての解釈をめぐって、ドウォーキンと見解を異にしたが、しかしそれはいうまでもなく、男と女の間にはすべて性関係である、というドウォーキンの主張を否定するものではない。むしろ、我々の議論はドウォーキンのこの主張を強く支持し、それをさらに補強するものだけであることができるだろう。したがって、我々は、男と女の間にある性差別という現象については、まず何よりも性関係そのものにそくして、そしてまた「女であること」とはどういうことなのか、をたえず問いかけながら、考察を進めていかなければならないのである。

3. 性愛の可能性

【1】ドウォーキンの信念

ドウォーキンの議論に含まれるもう一つの主張は、性関係はすべて性差別である、ということであった。そしてこれこそ彼女の議論の核になる思想だといえる。すでに検討した「反逆としての処女性」という概念にみられるドウォーキンの独自性も、男と女の性関係（性的行為）がそれ自体つまるところ支配—服従関係という政治的関係に他ならず、それ以外の何ものでもない、というこの思想の反映に他ならない。だからこそ、ドウォーキンは、ジャンヌが性的対象とならなかった（つまり、そこには男と女の性関係はなかったことになる）という事実を、支配—服従関係という政治的関係から離脱したことだと解釈できたのである。我々は今や、このドウォーキンの核心的思想を問題にせねばならない。性的行為はいかなる場合においても政治的関係でしかありえないのだろうか、男と女の間には平等な性関係は成立しないのだろうか。

これまでみてきたように、ドウォーキンのあ

らゆる議論は、男と女の性関係（性的行為）はすべて支配—服従関係という政治的関係である、という思想から導きだされたり解釈されたりしたものであったが、その思想自身については、いかなる根拠も示されていない、といってよい。ドウォーキンは、「男と女の性関係（性的行為）はすべて支配—服従関係という政治的関係である」と前提し、そのような視点から、現在目の前で繰り広げられている男と女のあらゆるドラマがいったいどのように見えるのか、それを克明に記述していったのである。そしてそのような視点からみた男と女の世界が、我々がこれまで素朴に信じて疑っていなかった世界と、たとえば「男と女の性関係（性的行為）は、二人の愛の証しである」という視点から見た世界とが、いかに違って見えるのか、を示してみせたのである。

男と女は恋に落ち、愛しあって結婚し、子どもを生み幸福な家庭を築く、それが当然である、という感覚、もっといえば、女は愛する男に一生に一度めぐり会い結婚し妻となり、その愛の証しとして性的行為が行われ、その愛の結果として子どもに恵まれ母となる、これに勝る幸福はない、という信念には、実はそれを論証するいかなる根拠もないという事実を、我々はさまざまな社会史の知見から学ぶことができる。我々が現在知っている「異性愛」や「子ども」や「家族」や「結婚」という概念が、いかに普遍的で疑いようのないほど自明なことに思えようとも、そうしたいわば「自然な感覚」はいつでも疑うことができるのだ、ということをお我々は知ったのである。ドウォーキンは、「愛しあうがゆえに男と女は性的行為を行う」という我々の「自然な感覚」、いわば一つの信念にすぎないものに、もうひとつの信念を、つまり「性的行為とは、愛の証しではなく、男が女を支配す

るという究極的な差別が行われる現場である」という信念を対峙させたのだ、といえる。そのような信念がもし「自然な感覚」として受容されているとすれば、我々の生きているこの世界は、どのような様相を呈することになるのか、それが彼女にとって明らかにすべきことだった。しかし、我々は、まず「愛ゆえのセックス」というイデオロギーも、また「セックスこそ差別の証し」という信念も、それを論証する根拠はない、ということをはっきりと認めなければならない。

しかし、そのことをはっきり認めただけで、性差別の根源を男と女の性関係（性的行為）そのものに見出そうとするドウォーキンの視点——それはまさにラディカル・フェミニズムがラディカルであることの証しのようなものである——の意義・重要性を、我々はけっして過小評価することがあってはならない。「愛ゆえのセックス」という視点と「セックスこそ差別の証し」という視点が、ともに根拠がないという点で同等だとしても、我々の現在生きている世界に「愛ゆえのセックス」というイデオロギーが普遍的な真理であるかのように浸透しているということを考慮すれば、そのような世界観をいったん相対化し、世界というものが他のようでもありえたかもしれない、ということをも改めて認識するために、「セックスこそ差別の証し」という別の視点から発想することがいかに重要であるか、は明らかである。性差別の構造をその内部に孕む男社会には、「愛ゆえのセックス」という信念を「自然な感覚」として受容させるような力が働いている。そのような社会に生まれ育つ我々は、放っておいても「愛ゆえのセックス」という視点を内面化しそれを「自然な感覚」として受容するようになる。したがって、そのような力にあえて抗してまで、そうした

「自然な感覚」には根拠がなく、もしかしたら「セックスこそ差別の証し」なのかもしれない、という考えにいたることは、非常に困難だといえる。自明性のうちに埋没することはたやすい、しかし自明性を解体するという作業は、明確な意識と柔軟な想像力を持ち、なお常にそれを持続させるということなしには達成できないからである。ドウォーキンが、我々が通常の世界観のもとではけっして思っていたことのない「セックスこそ差別の証し」という視点を前提とし、そこから徹底的に世界を再構成するとどうなるのか、を示してくれたのである。それによって、我々は「愛ゆえのセックス」という「自然な感覚」が普遍的な真理ではなく、根拠のないイデオロギーかもしれない、というもうひとつの考えに思っていたことができたのである。その意味でまさしく、ドウォーキンの功績の意義——そしてラディカル・フェミニズムがあくまでラディカルであることの意義——は、強調しても強調しすぎることではない。

しかし、「女の状況」の根源的な劣等性を徹底して性的行為という現場に見出そうとしたドウォーキンのこの執拗な姿勢こそ、彼女の思想の最大の意義であると同時に、またフェミニズムという思想がその内部に懐胎せざるをえなかった矛盾がまさに生成される源でもある。ドウォーキンの主張の意味するところは、女が男によって見られ欲望されるということ自体、女が性的対象とされることそれ自体が、ただちに女が男によって支配されていることになる、ということである。この論理にしたがってドウォーキンの議論は行き着くところまで行くことができる。つまり、性関係（性的行為）はすべて支配—服従関係という差別的な関係なのだから、差別されないためにはその性関係から逃れるしかない、あるいは逃れられないのなら女性という性を捨

てるしかない、という結論を導くことができる。しかし、ドウォーキン思想それ自体は、論理的な必然というよりは、一つの信念と呼ぶに相応しいものである。だとすれば、その信念を根拠にして、以上のような結論を導くことに、さしあたって正当性はないといってよい。ドウォーキンは一つの信念にすぎないものを前提として、そこから必然的な論理的結論を導きだした。しかしその前提に根拠がない以上、その結論を受け入れる必然性もない。

ドウォーキンは、女の状況を性関係にのみ、そして性関係を最終的に性的行為にのみ集約させた。彼女は自分の信念に固執するあまり、つまり、性的行為の中に、絶望的なまでに差別の苦痛を見出してしまったがゆえに、そうした女の状況から離脱することこそ、何よりも女にとって望ましいことであると考えたのである。しかし、はたしてそうだろうか。性的行為はいついかなる場合にも、政治的関係でしかありえないのか。男と女の間には、平等な性関係はありえないのだろうか。男と女の間には、どんな未来も、どんな想像性・創造性もみいだすことができないのだろうか。ドウォーキンの絶望は、我々の絶望なのだろうか。我々はこのような問いを、さらにドウォーキンの議論に内在するかたちで進めていきたい。はたして、ドウォーキンの議論のインプリケーションとは、彼女の絶望を導きだすだけで終わるものだろうか。

【2】ブランチの狂気

ドウォーキンは、性交が女に対する男の侮蔑心の正式な表現形態であり、ポルノグラフィがそれを性交以外の場面で表現する場合の手段になっている、という現状を踏まえうえて、そこからの脱出路をどこにみいだせばよいか、を論じているくだりで、次のように述べている。

「セックスをしなくてもよい自由を確立すること、女の性的快樂の点で性交が低い価値しか持たないことを反映するように、社会構造を改変すること、性交は（仮説的に）平等である者たちが関与する多くの性的行為の一つであり、他のより深く、より長く、おそらくはより官能的な性愛行為の一部であるという意味づけを確保すること、生殖のために女が性交を強いられる必要は今やなくなっているという理由で——、女の劣位という状況を終わらせること」〔239〕。

ドウォーキン自身は、男の女に対する憎しみがあまりに強いという理由からこのような社会が到来する可能性についてはほとんど否定している。しかし、ここから我々は、ドウォーキンが次のような考えを論理上否定しているわけではないことがわかる。つまり、男の女に対する支配の形態は究極的には性交（挿入）そのものである、しかしまた、性交以外に、それよりもはるかに豊かな性的行為ないし性愛行為という性関係が男と女の間には成立する可能性があり、それは平等な関係かもしれない、という考えを。

事実認識として、ドウォーキンが現状の男と女の性関係にほとんど絶望していることは明らかである。しかし、以上のような言い回しからも推測できるように、性関係すなわち性差別、という彼女自身の信念を、内部から突き崩すような突破口が、彼女の議論の中に僅かながら見出すことができるともいえる。これは非常に興味深いことだ。なぜなら、厳密に言えば、こうしたドウォーキンの考えは、これまで述べてきたドウォーキン自身の思想の一貫性に亀裂を生じさせるからだ。男女のあらゆる関係にあまねく浸透している政治的関係が性的行為にまで貫通している、つまり、性的行為はすべて差別である、という徹底した主張こそドウォーキンの思想の真骨頂であり、性的行為には差別的なも

のとそうではないものがある、という主張は、思想の一貫性を欠くばかりか、その衝撃性を著しく弱めてしまうだろう。さらに、このような性的行為と性交の分離は、「セックスこそ差別の証し」という前提が、やはり結局は根拠のない信念にすぎないのだということを、より鮮明に意識させることになる。なぜなら、おそらく差別的な性的行為を平等な性的行為から分かつ基準を設定することは、大変な困難であり、もしそれを性交（挿入）という即物的な行為にのみ求めるとすれば、もはやその無根拠性、恣意性は明らかであるからだ。

我々はここで、ドウォーキンがセックスそのものについて、あるいは人間の性的欲望というものについてどのような考えをもっているのか、を簡単に検討してみたい。その考察の手がかりは、ドウォーキンがテネシー・ウィリアムズ (Tennessee Williams) の戯曲の分析に用いた「烙印づけられた(stigmatized) 人間」という概念に求められる。

ドウォーキンは『薔薇のいれずみ』のセラフィーナ、『夏と煙』のアルマ、『欲望という名の電車』のブランチの三人の女主人公たちを「烙印づけられた人間」として位置づけている。烙印づけられた、とはセックスに烙印づけられた、ということである。「セックスにひた走り、セックスを必要としている者、セックスに没入する者、セックスに烙印づけられた者は、世界の中の不安と狂暴性を具現し、性交によって定義づけられる人間である。この場合性交とは、生来の適性や衝動強迫に駆られたものとしての性交、いかなる社会的、因習的、順応的なものによっても充足されることがない、達成し得ない欲望としての性交である」(66-7)。

人間の内面に、けっして洗い落とすことのできない印として焼きつけられる性的欲望。それ

は、罰であり苦しみであり罪である、それを負う人間は、それを負わない人間とは違う異質な人間、特別な人間であり、最終的には、排斥され孤立させられる。「烙印づけられるとは、セックスが必ずもたらす損失を我が身の上に引き受けることである。即ち、人間的な内面を持つことであり、それだからこそ、経験——性の経験を含めたすべての経験——が、その内面で人間的な共振を起こすのである。烙印づけられるとは、生来の性の才能のみならず、おそらく喪失や苦しみや絶望や狂気といった人間の結果を受容する生来の才能をも備えているために、並の人びととは異質になってしまうことである」

[74]。ドウォーキンによれば、烙印づけられた人間とは、まず、異質な人間である。通常の人間が、社会的に規定された性交の意味の内側にのみ存在するのに対して、烙印づけられた人間は、そのような性交の意味によってはけっして充足されることのない性的欲望をその内に宿している。それゆえに異質だということになる。

ドウォーキンは、『欲望という名の電車』におけるブランチをそのような意味での異質な人間として捉え、妹夫婦ステラとスタンレーの凡庸さとの鮮やかな対照の中で、彼女のセックスと愛に対する「人間的な能力」について分析を加えている。

ブランチの物語は、一つの悲劇だといえる。アメリカ南部の裕福な家庭に育ったブランチは、16才ではじめて恋を知り結婚する。しかし愛する夫が年上の男とキスをしているところを目撃し、そのことを夫に告げたため、夫は自殺する。「死の対極は欲望である」と言うブランチはその後多くの男たちに欲望を燃焼させ、教子の17才の少年とセックスをしたために、教師の職も追われ、長患いの末に死んだ母親の葬式代や借金のために広大な家屋敷も失い、失意

の果てに妹夫婦のところへ身を寄せる。すでにあらゆる可能性を否定されていたブランチは、自分をこの現実には繋ぎとめておく唯一の残された道として、スタンレーの友人ミッチとの結婚に望みをかけるが、それもブランチの過去の噂を町で聞きつけてきたスタンレーの悪意によって打ち砕かれる。さらに、ステラが出産のため入院している間にスタンレーに強姦され、その事実をステラが信じなかったため、ブランチはもはや現実をうけとめるいかなる能力をも失い、精神病院に送られる。

スタンレーとステラは、いわば「愛ゆえのセックス」を素朴に信じて平凡な生活を送るごく普通の夫婦である。スタンレーにとって、本能の赴くままに女相手の快楽を享受することはまさに「自然」であって、そこには自意識や内省が入りこむ余地はまったくない。彼は「人為」ということを知らず「感受性」というものを備えていない「原型的なオスの動物」である。ドウォーキンがスタンレーについて「内面的生活を全く持たず、いかなる結果にも傷つかず、感覚以上の記憶も全く持たないため、動物的な性衝動を抱えてはいても、実際にはいかなる経験の意味にも触れることがない。即ち、彼は凡庸な人物なのである」〔77〕という。そしてステラは、夫の暴力を伝統的な男らしさの価値として受け入れ、殴られてもなお夫を欲し続け、夜の暗がりの中での出来事ゆえに、すべてを許す。スタンレーとステラは、社会が彼らに与える男と女の領域の中において、ドウォーキンのいう「占領と結託」⁽⁹⁾の強固な関係を保持している。その「殴打と性交のドラマ」は、まさしく習慣的なものであり、何ら特別なものではない。

通常、スタンレーとステラはごく普通の夫婦であると見なされ、ブランチは、ふしだらな女として弾劾される。しかし、ドウォーキンは、

ごく普通の夫婦が「愛ゆえのセックス」という美名の下で、いかなる経験の意味にも触れることのない単なるオスとメスになっている姿を暴きだし、ブランチの中には、経験というものを自らの内面で共振させる人間的な能力というものを見出している。「烙印を押されるとは、様々なことを感じ取る内面的な能力が極立っていることである。スタンレーの動物じみた性衝動の特質と対照させてみれば、ブランチの烙印づけられた特質は、セックスと愛、とりわけ孤独と悔恨の結果を内面で苦しむ、明確に人間的な能力として浮かび上がってくる」〔79〕。ブランチは、スタンレーのような、女に対する暴力とセックスを伝統的な男らしさの価値だと信じて疑わない粗野で下品な男とは、まったく対極に位置する、スタンレーとはまったく異質な「感受性」を持つ恋人を常に欲し、結果的に次々と男を求めることになったのである。彼女の性的欲望が、常識の枠を越えるものであったため、常識の枠に囚われている人々から、ふしだら女の烙印を押されることになった。しかし「彼女が烙印づけられることになったのは、まさに凡庸なもの——凡庸な男らしさ——とのこうした対立であり、「彼女の性的欲求、愛する能力、欲望の核心にある深い苦悩が、凡庸な男らしさとの対立を生じさせていたのである」〔80〕。

ブランチの性的欲望とは、いわゆる「女の状況」の中で男から女に与えられるセックスではない、別のセックスを求める衝動だと考えられる。しかし、その欲望は「女の状況」の中ではけっして達成されることがない。烙印づけられた者とは、未だ誰も知らないセックスの意味を激しく求めるといふ、その常識外れの欲望ゆえに、最終的には常識的な世界の外へと弾きだされる。ブランチの狂気は、「性の知識を持ってしまった者に与えられる最悪の結果、死よりも

残酷な最悪の罰」〔83〕なのである。スタンレーには、性交と強姦の区別はない。「強姦と性交を識別するには、苦しむ能力も含めた人間的意識が必要である」からだ。「彼女は、スタンレーが彼女に行なった強姦の意味を知っているために、罰を与えられている。知って感じるという彼女の能力は、彼の敵だからである。そもそも強姦自体が、動物的な男らしい男が与える動物的な性交以上のものを欲する女に対しての、また、それ以上のものを感じ、欲し、知る女に対しての復讐に他ならなかった」〔83〕。ブランチは、ステラとは異なり、「女の状況」から一步も出ないセックスがどのようなものであるかを知っている。知っているがゆえに、それとは違うセックスを求める。これが烙印づけられるということの意味である。通常の性交が何であり、その性交以上のものが何であるかを知り感じる能力は、「愛ゆえのセックス」を享受する男にとって（そして女にとって）邪魔であり、嫌悪の対象となるのである。

ドウォーキンは、ブランチを烙印づけられた人間として位置づけることによって、単なる性交以上の性交を求める衝動が、人間をいかに絶望的な状況へと追い込んでいくか、を描きだしている。「女の状況」というものから脱出しようという志向性をもつ人間は、結局挫折し、喪失や苦しみや絶望や、そして狂気まで受容することになる、といたいのかもしれない。『インターコース』の文脈では、確かに、「愛ゆえのセックス」ではない別の、もう一つの〈愛ゆえのセックス〉⁽¹⁰⁾ がいかに幻想であり、その幻想を追い求める人間は、常識外れの性的欲望をもってるとみなされるがゆえに、烙印を押され追放という罰を受けることになる、という絶望的な状況を開示するために、ブランチの狂気が分析されているとも考えられる。

しかし、ブランチの狂気にこそ、我々は逆に、唯一僅かに残された可能性、すなわち、性愛の可能性を見出すことができるともいえるのではないだろうか。ドウォーキンは、「単なる性交自体以上のものを欲し、必要とする内面生活を持つことは、性交に、人間的状況中での人間的意味を付与する」〔84〕と述べ、「人間的な切望や人間的な意味を備えたセックス」「露骨で冷酷で荒々しい性交以上のものへの欲求、孤独や欲求不満のとげとげしさが無い官能性の使用」、「やさしさと感受性を備えた性交」を求めたブランチを、そしてそれを求めたがゆえに狂気という罰を受けたブランチを、しかしそれでもなお、そうした「セックスと愛」を求める能力とその結果としての孤独と絶望と狂気を受容する「明確に人間的な能力」を備えた人間として描き切っているのである。確かに、ブランチの狂気は、ドウォーキンにとって、絶望の象徴としての意味の方が大きいかもしれない。しかしブランチは、結果として「女の状況」の中へと囲いこまれながら、その中で、性交がどのようなものであるか、そして性交以上の性交がどのようなものであるのかを知っていたのである。それを知り感じ欲する能力を持つことができたのである。このことはきわめて重要な意味をもつ。ブランチは、「愛ゆえのセックス」を「自然な感覚」として受容する凡庸さを持ち合わせず、「セックスこそ差別の証し」という感覚に基づいて世界を相対化することに成功し、しかもなお現実の世界に、差別の証しではない別の愛とセックスの可能性を求めたのである。ドウォーキンが頻りに用いる「人間的」ということばには「平等な」という意味が含まれていることは明らかである。「やさしさと感受性を備えた性交」とはすなわち平等な性交ということであろう。ブランチは平等な性交を求めたがゆえ

に狂気に追いやられたのだ。確かに我々はこの、ドウォーキンが看破した絶望をみいだすことができる。しかし、また我々はこの、強姦に回収しつくされることのない性交の意味や、差別に転化されつくされることのないセックスの形態を追求しようとする志向性を見出すことができるのである。ブランチは、スタンレーやステラとは、明らかに異質な人間として描かれている。この異質な人間が、彼ら凡庸な人間たちと同じ現実の中で、別の可能性を志向した。愛とセックスについて別の意味を知り、それを求めることができたのである。ブランチは最終的に狂気という形でそれを受容するしかなかった。しかし、それが必然である保証はない。だから我々は、ブランチの狂気にこそ可能性をみいだすことが可能だ、と考えるのである。

【3】現実から現実へ

ドウォーキンがはたして、男と女の関係の未来に一片の希望をも見出せない、と言い切っているのかどうか、最終的に判断する根拠はない。しかし、いずれにせよ、ブランチという烙印づけられた人間が、この現実の世界において、「愛ゆえのセックス」という「自然な感覚」の欺瞞を看破し、そのうえでなお、〈愛ゆえのセックス〉の可能性を求めていた、ということは明らかだ。つまりブランチは、性関係がすべて性差別である、という現実を生きることはけっしてなかったのだ。我々が、ブランチの狂気にこそ可能性を見出せると考えるのは、ブランチの、現実に根ざそうとするこの強い志向性ゆえである。ブランチは現実の男たちとの性関係において、「やさしさと感受性を備えた性交」すなわち差別の証しではない性交を求め、その性的欲望を燃焼させた。そしてその欲望はけっして満たされることがなかった。しかし、ブランチは、

挫折に挫折を重ねていくそのただ中においても、なお男との関係を求め続ける。けっして男との関係から離脱しようとか、あるいは「女であること」を忌避しようとか、そういう志向性をもつことがなかった。むしろ彼女は「女であること」に徹底的に内属することによって、自らの生を全うしようとする。我々はこのブランチの生への志向性にこそ、多くを学ぶことができる。

なぜなら、男と女の性関係（性的行為）がすべていかなる場合にも支配—服従関係という差別的な関係でしかありえない、という信念を、他ならぬこの現実の世界において受容するということは、現実における自らの存在そのものを否定しつくすしかないところまで人を追い込むことになる、と考えられるからだ。すでに何度も指摘しているように、ドウォーキンのこの思想の意義はけっして否定できない。しかしその意義は、いわば思考実験という知的な営みの中でのみ意味をもつものである。我々が現実に、この世界に生まれ育ち生きるしかない、ということ徹底的に考慮するならば、この信念を現実において受容することの不可能性に思いいたることができるのではないだろうか。「女であること」（そして「男であること」）から一瞬たりとも逃れられないという状況こそ、我々がまさに依って立つ場所なのであり、ここから完全に自由になれるかもしれないという幻想のもとに発想されるいかなる思想も、最終的な説得力を欠くものとならざるをえないのではないだろうか。

我々は、ドウォーキンの議論の核となる一つの主張、「男と女の間にはすべて性関係である」という主張について、それをラディカル・フェミニズムが発見した画期的な視点として評価した。そして、もうひとつの主張、「性関係（性的行為）はすべて性差別である」という主

張について、そこにフェミニズムがその内部に孕む矛盾（平等志向が性差解消志向および差異強調志向へ転換する）を生成する源泉があることを指摘し、それが信念以上のものではない、ということ明らかにし、さらにその信念の正当性には強い疑義があることを示唆した。

我々は、性関係（性的行為）はすべて性差別である、という信念を受容して生きるということは、ある一つの錯覚を、つまり、我々が現実には生きているこの世界の外に、自分だけが簡単に立つことができる、という錯覚を受容して生きることになるのではないか、ということを中心としたのだ⁽¹¹⁾。性関係に徹底的な絶望を見出す前に、そして、差別から逃れるためには、性差そのものを解消するか、女だけのユートピアを建設するしかない、という結論を導き出す前に、まだまだ考えなければならないことが山積しているのではないか、ということ⁽¹²⁾。

しかし、我々は、科学技術によって性差を解消しようとする志向性、また「女だけのユートピア」を建設しようとする志向性を、その実現がさしあたっては困難であるから、という単なる機能的な理由から、斥けているわけではない。そのような志向性は、我々の議論からすれば、端的に非現実的(unreal)だということである。我々は、たとえ科学技術の発達によって、性差を解消することが可能になったとしても、また「女だけのユートピア」の建設の実現可能性がどんなに高くなったとしても、それを実現することが、男と女の間の平等を確立したことになるのかどうか、という点に、根本的な疑念をもっているのである⁽¹³⁾。

フェミニズムは男と女の平等を志向してきた。フェミニズムは個人的なところこそ政治的であると主張してきた。しかし平等とはどういうことだろうか。我々は、すれちがう道行く人々一人

一人と、法律的な権利において、経済的な権利において、平等であるだろう。我々は、一人の男と、あるいは一人の女と個人的に向き合っているとき、このような道行く顔も名も知らない人々と我々が平等である、ということとまったく同じ意味での平等を、その男に、その女に求めているのであろうか。確かに、ドウォーキンのように、我々の個人的・私的な男と女の関係のすみずみにまで政治的関係が貫いている、という事実認識は、ある意味では正しい。そこに、個人的・私的な関係が堕ちていく悲慘の極みがあることは事実だ。しかしまた、もし我々が人生の経験の意味に少しでも触れるような瞬間があるとすれば、それはこのきわめて個人的・私的な関係の内部⁽¹⁴⁾にこそあり、またそこにしかない、ともいえるのではないだろうか。ブランチの狂気が我々の胸を打つのは、彼女がこうした悲慘の極みのまさに絶壁に立ちながらなお、その現実のただ中から、性愛の可能性というものに賭ける生きかたを選択したからである。ドウォーキンはブランチの物語の中で問われているのは、「感受性を備えた人間が、己れをセックスに走らせてしまうその感受性の過剰と要求に駆り立てられながら、いかにして生き続けられるのか、という問いである」[77]と述べている。この問いを、ブランチのように、現実のただ中から問い続けること、そして誰も現実の外側というものを知ることはできないのだ、という端的な事実性を出発点とすること、そのことによって始めて、我々は男と女の性関係そのものの主題化に着手することができるのではないだろうか。

註

(1)フェミニズムの内部に孕まれる矛盾とは、言い換

- えれば、すぐれて近代の思想として誕生したフェミニズムが、その近代という社会的文脈の中で必然的に追い込まれざるをえない場所を指し示している。こうした矛盾が、いかに外部から仕掛けられているのか、という視点も重要である。この点については、稿を改めて論じたい。なお吉澤〔1989b〕を参照。
- (2)すでに述べたように、性差を解消しようとする志向性と、「女だけのユートピア」＝「女の女による女のための社会」を建設しようとする志向性とは、両者とも、平等という理念を押し進めていく果てに現出する可能性という意味で、同じものの裏・表ということができる。
- (3)以下、引用はすべてDworkin〔1987=1989〕のもので、〔 〕内の数字は、邦訳書の頁を示す。
- (4)処女性という概念は、社会によって、また時代によって、さまざまな受け止められ方をしている。この点についてはフックスの研究を参照(Fuchs〔1909=1968〕)。ただ、ジャンヌ・ダルクの時代に、処女性が、一般に、女らしさや女としての高い価値を表現するものであったことは疑いが無い。
- (5)中世のフランスにおいて、聖母マリアを信仰の対象とする、いわゆるノートルダム信仰が根強かったことは、よく知られている。ノートルダムとは、すなわち「我々の女」(Notre Dame)である。
- (6)通常、「特別な女」とみなされるのは、「聖なる女」すわち聖女の他に、「汚れた女」すなわち娼婦がいる。敵軍イギリスの兵士たちは、ジャンヌをたえず「売女」と罵り、悪意に満ちたまなざしを送っていたという。ジャンヌは、フランス軍の兵士たちから「特別な女」だと見なされていただけでなく、イギリス軍の兵士たちからも「特別な女」だと見なされていたのだ。この意味で、まさに聖女と娼婦は、普通の女に対する「特別な女」として表裏一体の存在だといえる。「我々の女」とは、したがって、誰のものでもない聖女のことであり、
- また誰のものでもある娼婦のことである。
- (7)ジャンヌ・ダルクの生涯については、高山〔1982〕を参照。
- (8)我々はかつて、このような「女の状況」を、男と女の「差異の構図」として定式化した。それは、まず①男に構造的に与えられるアドヴァンテージの存在、によって基礎づけられ、そうした事実があるがゆえに、②「女であること」のさまざまな効果、がいわば副次的に生じ、両者が複雑に絡みあって構成される、性差別(男性優位主義)体制である。吉澤〔1989a〕参照。
- (9)「占領と結託」は、『インターコース』第二部VIIの表題である。占領(occupation)とは、文字通り、男が女の中へ侵入し、女の肉体的(そして内面的)プライベートを占領することを、結託(collaboration)とは、そのように占領されるという「女の状況」へと女たちをおとしめるために、男と結託すること、また女同士で結託することを、意味する。
- (10)本稿の文脈では、「性交」が「愛ゆえのセックス」に、「性交以上の性交」が〈愛ゆえのセックス〉に対応する。
- (11)たとえばルーマンは、世界をまるごと主題化できないということ、すなわち世界を「外から」観察する主体としての「私」の存立がもはや不可能であり、「私」が常に世界の一部であること、を常に考慮して社会理論の構築を進めている(Luhmann〔1984〕)(吉澤〔1987,1988〕)。我々も基本的に、このような前提のもとに「差異の構図」という定式化を行なった。
- (12)ブランチの狂気にこそ性愛の可能性が見出せる、という我々の姿勢や、ドウォーキン結論を受容する前にまだまだ考えるべきことがある、という我々の主張は、ドウォーキンの信念に対する、またもう一つの信念である、といってもよい。問題は、どの信念により説得力があるか、ということ

である。

(13)我々は、「女であること」(あるいは「男であること」)を、たとえば、「先生であること」「主婦であること」といった職業や地位や役割に還元できるような種類の属性とは、きわめて異質な(どのように異質であるか、という点については今の段階でははっきりと分節化できないが)属性だと考えているのである。

(14)それはおそらく愛の関係とよべるものであろう。そしてもちろん、これは男と女の間に限らず、男

と男、女と女の間にも成立可能なものである。しかし我々は、ホモセクシュアルやレスビアンが、通常の男女関係よりも解放された関係だ、という考えには賛同しない。ドウォーキンが示したのは「異性愛の制度」がいかに強固なイデオロギーとして我々の社会で機能しているか、ということである。そのような社会に我々が内属している以上、そこでの男と男の関係や女と女の関係には、ドウォーキンが分析したような男と女の関係における政治性が強く影を落としていると考えられるからだ。

文献

- Donovan, Josephine 1985 *Feminist theory*, Frederick Ungar Publishing Co.,Inc.=1987 小池和子訳 『フェミニストの理論』 勁草書房
- Dworkin, Andrea 1987 *Intercourse*, The Free Press=1989 寺沢みづほ訳『インターコース』青土社
- 江原由美子 1985 『女性解放という思想』 勁草書房
- Firestone, Shulamith 1970 *The dialectic sex*, William Morrow & Company=1975 林弘子訳『性の弁証法』評論社
- Fuchs, Eduard 1909 *Illustrierte Sittengeschichte vom Mittelalter bis zur Gegenwart*=1971 安田徳太郎訳『風俗の歴史』角川文庫
- 橋爪大三郎 1989 「性の未来都市」『都市』II 都市デザイン研究所
- Luhmann, Niklas 1984 *Soziale Systeme*, Suhrkamp
- 1988 'Frauen, Männer und George Spencer Brown', *Zeitschrift für Soziologie*, Jg.17, Heft1, Feb.
- Millett, Kate 1969 *Sexual Politics*, Abacus =1985 藤枝滯子訳『性の政治学』ドメス出版
- 大越愛子 1988 「第二期フェミニズム理論の現在」『別冊宝島85』J I C C 出版局
- 大澤真幸 1989 「孤独・性愛・信仰」『NUDE 3』朝日出版社
- Segal, Lynne 1987 *Is The Future Female?* Virago Press=1988 織田元子訳『未来は女のものか』勁草書房
- 高山一彦 1982 『ジャンヌ・ダルクの神話』講談社現代新書
- 上野千鶴子 1986a 『女は世界を救えるか』勁草書房
- 1986b 『女という快楽』勁草書房
- 渡辺和子 1988 「八〇年代の白人フェミニストたち」『別冊宝島85』J I C C 出版局
- Williams, Tennessee 1974 *A streetcar named desire*=1988 小田島雄志訳『欲望という名の電車』新潮文庫
- 吉澤夏子 1987 「世界・〈できごと〉・時間」山岸健編『日常生活と社会理論——社会学の視点』慶応通信
- 1988 「観察と他者性」『哲学』第86集 三田哲学会
- 1989a 「差異の構図——「女であること」の社会的効果」『フォーラム』第5号 跡見学園女子学園文化学会

(よしざわ なつこ)

原稿募集

以下の要領で、『ソシオロゴス』第15号の原稿を募集します。

※内容—社会学および隣接諸分野に関する研究。

※形式—(原則として)日本語、英語で書かれたもの。400字詰40枚程度。英語題名及び日本語のアブストラクト、英語のアブストラクトを付すること。なお、12号より版下作成をワープロ化いたしましたので、ワープロ原稿の方は、出来ればMS-DOSのテキスト・ファイル、もしくはOASYS各機種のプロッピー・ディスクを御用意下さい。

※申込締切—寄稿予定者は、1990年11月10日までに、ソシオロゴス編集委員会に葉書で申込むこと。葉書には、名前、住所、電話番号(必ず)、所属、テーマ、枚数を書くこと。なお、1人あたり複数の論文の寄稿は原則としてお断わりいたします。

※寄稿締切—1991年1月11日までに、ソシオロゴス編集委員会に提出する。

※寄稿資格—所属、専門、職業などは一切問いません。

※負担—寄稿者は、掲載される原稿の分量に応じて、然るべき負担をしていただきます。実際の負担額は、編集完了後に御請求いたします。

※本誌に掲載した論文の著作権は当委員会に属しますので、予め御了承ください。

※発行予定日—1991年6月1日

1990年7月1日

ソシオロゴス編集委員会